様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０４５２

研究課題名（和文）言語発達遅滞の症例分析に基づく文法能力獲得の実証的研究

研究課題名（英文）The Emprical Research on the acquisition of the grmmar based on the case analysis of Language retarded Children

研究代表者
高井　岩生（TAKAI, IWAO）

九州大学・人文科学研究院・専門研究員

研究者番号：３０４３７７５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：これまで，文の産出・理解には，動詞などの述語が持つ項構造の情報が不可欠であると言われてきた．しかし，同じ項でも，格助詞からその意味役割が予測できるものと格助詞から意味役割が予測できないものがあり，これらが一様に獲得されるのかどうかということは明らかではなかった．本研究では，項構造の情報が文からどのように読み取れるのかということを，受身文の分析を通じて明らかにした．アスペクトなどの要因に左右されない要素を項とみなし，左右される要素は付加詞とみなされる．次に，ある述語の項の個々の意味役割や項の意味タイプなどの情報は，その述語と他の述語との意味的差異を利用して，獲得していくということを示唆した．

研究成果の概要（英文）：It has been said that information of the argument structure which the predicates such as verbs had was indispensable for the production, the understanding of the sentence until now. However, we may predict the semantic role from a case particle, and we maynot predict the semantic role from a case particle.It was not apparent whether these were acquired equally. In this study, I made clear how you could read information of the argument structure from a sentence through the analysis of the passiveness sentence. I consider a element not to depend on the factors such as aspects to be a argument, and the element to be influenced by the factor to be adjunct. Then, we suggestes that the information such as the individual semantic roles of the arguments of a certain predicate or the meaning type of the arguments are acquired using the semantic difference with the predicate and other predicates.

研究分野：言語学

キーワード：項名詞　項構造　付加詞　言語獲得　受身文　アスペクト

１．研究開始当初の背景

(1) 言語発達に支援を要する者・児は，言語を獲得できない，または獲得結果が異なっているのではなく，獲得のスピードが健常者・児に比べて遅いだけであるという臨床の現場の知見（今村亜子氏：個人談話）に基づいて，項構造の獲得を観察するために，要支援者・児に注目した．

(2) 現在の言語療法の現場で主流となっている絵カードを用いた検査方法は不十分な点が多く見受けられるので，動画を用いた検査手法を考案したいと考えた．

２．研究の目的

(1) 項構造の獲得過程を実証的に明らかにする．項構造のどの情報を獲得すれば，文産出・理解がどの程度まで発達するのかということを説明できるような理論構築を目指す．

(2) 現在の検査手法のように，一連の動作を一度にすべて見せるような形式ではなく，項構造のどの部分を獲得しているのかということが判断できるような動画刺激による検査手法を考案する．

３．研究の方法

(1) 項構造の内容と産出可能な文との対応関係を説明できるような理論を構築するために，項構造の内容が大きく書き換えられる構文の産出・理解の仕方を分析する．具体的には，受身文を分析し，項構造の内容の変化が構文の産出にどのような影響を与えるのかを調べる．

(2) 言語発達の要支援者・児に対して，下で述べる４つの検査を行う．

a.　項名詞句の交換及び動詞の交換に対応できるかどうか．

b.　項構造に基づいて，項名詞句に付く格助詞の選択ができるかどうか．

c.　主語のガ格名詞句の意味役割を正しく理解できるかどうか．

上記の検査により，以下の点を実証したい．

(1) 項構造が獲得されていない段階では，動詞と項名詞句との組み合わせが不可能であるか、困難である．
動詞による名詞句に付く格助詞の選択が不可能であるか、困難である．

(2) 項構造が獲得されている段階：
動詞と項名詞句との組み合わせが可能である．
動詞による名詞句に付く格助詞の選択が可能である．

４．研究成果

各述語が持っている項構造の情報が文構築の際に、どのように利用されるのかということ、文が構築されていく過程で、格助詞がどのような役割を果たしているのかということが部分的にであれ解明することができた．臨床の場での症例分析も基にして，項構造の情報に対してより精密な形式化を行った，今後は，本研究で構築した項構造の理論を基にして，項構造の獲得のモデルをさらに精密に形式化したい．

理論的な成果

(1) 直接受身化は，項構造においてヲ格が指定されている場合のみ可能であるということを論じた．この研究により，項構造には意味役割の指定だけではなく格助詞の指定も必要であるということを示した．

(2) 直接受身文に生起しているニ格名詞句は付加詞であると分析し，付加詞の統語的生起条件と「意味」的な適格性を決定する条件とは異なるということを論じた．この研究により，文法能力を獲得するためには，項構造だけではなく，アスペクト的な素性も必要であるということを示した．

(3) 項名詞と付加詞に注目し，文構築のメカニズムは，動詞とアスペクト的に結びつくの

か，あるいは中核的意味の点で結びつくのかという点で，項名詞と付加詞とを区別しているということを明らかにした．

臨床的成果

(1) 要支援者・児に，様々な動詞文を提示しているうちに，動詞の意味的差異を利用すれば，対象者の理解が進むということが分かった．動詞を個別的に提示していくのではなく，意味的に類似している動詞群から，その差が最も顕著に現れるようなペアを作り，それを提示する方が効果的である．従来から広く受け入れられている「語は差異の体系を作っている」という考え方が正しいということが示されたと考えている．動詞の意味の差異をさらに明示的に提示できるような手法が確立できれば，動詞獲得の支援のために利用できる可能性は高い．

(2) 要支援者・児に，ある動詞の動作を理解させるためには，典型的な意味を持つ名詞を項とした構文を提示し，それらの名詞の意味から動詞の意味を推測させるという手法が有効であるということが示唆された．今後は，コーパスなどを利用し，多義的な動詞が，それぞれの意味を表す場合，典型的にどのような意味タイプの項名詞と共起するのかということをパターン化できれば，動詞獲得の支援のために利用できる可能性は高い．

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

① 高井岩生 (2016) 「3 項動作語と直接ニ受身文」『九州大学言語学論集』第 36 号 183-196 頁［査読あり］

② 高井岩生 (2015) 「日本語受身文のスコープ解釈可能性とニ格名詞句の意味特性」『九州大学言語学論集』第 35 号 197-210 頁［査読あり］

③ 高井岩生 (2015) 「3 項動作語の受身化可能性」『2015 年度台湾日本語文学国際学術研討會国際會議手冊』119-126 頁［査読なし］

④ 高井岩生 (2014) 「2 つのニヨッテ受身文と 1 項化」『九州大学言語学論集』第 34 号 97-112 頁［査読あり］

⑤ 高井岩生 (2014) 「直接受身化と 1 項化のラレ」『2014 年度台湾日本語文学国際学術研討會国際會議手冊』93-99 頁［査読無］

〔学会発表〕（計 4 件）

① 高井岩生（2017） 名詞に対する意味的制約と動詞の特性 2017 年度台湾日語文学国際学術研討会 2017 年 12 月 20 日発表 於輔仁大學

② 高井岩生，林下淳一 (2015) 日本語の受動文 2015 年度日本言語学会 於名古屋大学

③ 高井岩生（2015） 3 項動詞の受身化可能性 2015 年度台湾日語文学国際学術研討会 於輔仁大學

④ 高井岩生 (2014) 直接受動化と 1 項化のラレ 2014 年度台湾日語文学国際学術研討会 於淡江大學

〔図書〕（計 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
［講演］

① 高井岩生 (2014) 「文法操作の項構造利用可能性」，科研合同ワークショップ「言語の理論・理解・発達遅延」 於 金沢大学，2015 年 3 月 31 日

６．研究組織
(1)研究代表者
高井　岩生（TAKAI，Iwao）
九州大学・人文科学研究院・専門研究員
　研究者番号：30437751

(2)研究分担者
（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

　研究者番号：

(4)研究協力者
今村亜子（IMAMURA, Ako）
灘吉享子（NADAYOSI, Junko)
井上康子（INOUE, Yasuko）
加藤麻衣子（KATO, Maiko）
安永大地（YASUNAGA，Daichi）